大地

第 35 号
2010.9.01.発行
浄 國 寺
上越市寺町3-14-10
☎025-523-5724

俳句

山崎 睦

紺碧の秋空二すじ飛行雲
夕立も嵐となりてガラス打つ
万緑の力の限り庭の木々
巣立つ子を鳥も同じ親であり
アジサイの根元に鳴きし雀の子
沈香の香り残りし彼岸堂
同朋会沈香のけむり真っすぐに
さまざまな想ひ出余念なき端居
念仏の日々とは行かず更衣

心に耳を押し当てよ

山崎 隆昌

詩人吉野弘の作品に「漢字遊び」シリーズがある。漢字のつくりや読みからイメージをふくらませ言葉を連ねる。詩というより文字通り言葉の遊び。たとえば次のような作品

《忌》
忌むべきものの第一は
己が己がという心

《対決》
馬と蚤との対決
騒然！

皮肉、風刺、ユーモア、何というかどの作品も兎に角おもしろい。言葉が動いている。自分もまねをして、二つ三つ作ってみたがどうにも上手くいかない。面白くない。

この「漢字遊び」シリーズで、私が一番好きなものは「恥」という作品。

《恥》
心に耳を押し当てよ
聞くに堪えないことばかり

ナルホド、ナルホドとうなってしまう。

「恥」は、恥をかく、赤恥、厚顔無恥、等々、普段の生活では、恥は他との関係、他との比較から生まれることのようだ。

私たちは人と人との関係性の中で生活しており、容姿や服装、成績や地位、住む所から出自まで、全てが比較の対象となる。他とのそれが上手く行かぬことや、自分の思いと違うことが、恥を生みだす因となる。赤面したり、冷や汗をかいたり。

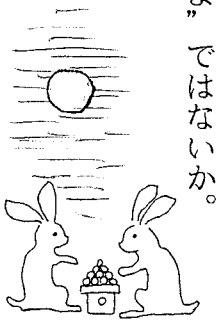
言うまでもなく、吉野の詩に表現された恥は、関係性のそれとは少しちがう。ここでは、自らの心に、その恥ずかしさを見ているのだ。そして、心の中には聞くに堪えないことばかりと言う。

親鸞聖人は自らについて、次のように述懐されている。

「悲しいことであるが、愚禿の親鸞は、愛情や欲望の広い海に沈没し、名誉や利欲の大山に迷い惑わされて、真の信心を獲得した人の仲間に入ることを喜びとしない。真実のさとりに近ずくことを安楽としない。恥ずべきことであり、傷むべきことである」

『教行信証』より（山崎 意訳）

膨大な情報に溢れ、猛烈なスピードに追われる現代人に、いま求められていることは、“心に耳を押し当てよ”ではないか。



そこにあること

柴田法子

四十才のとき、初めて犬を飼うことになりました。東京から軽井沢に引っ越して一年過ぎ、下の娘が犬を飼いたいといったことがきっかけでした。絵描きである主人が「色は黒」ときめて知合いにお願いしておいたところ、しばらくして一頭だけ黒い犬が生まれましたと連絡がありました。そして十二月二十四日、クリスマスイブに、黒いラブラドールの子犬が家にやってきました。迎えに行った時からおとなしい犬でした。きゃんきゃんとじゃれ付いてくる白ラブの兄弟から一匹だけ離れて、ゲージの奥のほうで、背中をむけていました。めったに吠えず、動きもどことなく鈍くさい、よくいえばおっとりしています。ただ、たいへんな食いしん坊で、うっかりテーブルの上に食べ物を出しておくと、目を離したすきに食べられてしまうことがしょっちゅうありました。息子のお弁当用に作ったおにぎりをすっかり食べられて、慌ててコンビニに走ったこともありました。ゆでたタケノコを失敬した時は、外側の皮を食べているうちにいやになったらしく、中のおいしいところが放り出されていました。

そんないたずらも、おこる気はせず、つぎつぎ反抗期にはいった二人の息子達も、犬の話題にだけは乗ってきて、いっしょに笑ったり、かまったりするのでした。想像していた以上に、犬は気持ちのやりとりができる動物でした。言葉を話すわけでもないのに、こちらの思うことをよく理解し、また犬の思いも伝わってきました、怒られればぎゅっと目をつぶり、からかって悪口をいえばあくびをします。子供と親子喧嘩をすれば、次の日にはぐったり元気がなくなってしまうのでした。話せなくても、いえ、しゃべらないからこそ、いつも犬がどんな気持ちでいるのか、あれこれ考えることが家族の習いとなりました。

犬が六才の時、次男がカナダに留学しました。彼が家を出てから七カ月後、主人の仕事の事もあり、家族でカナダに旅行することになりました。出発が近づいたある日の明け方、夢を見ました。私が座って洗濯物をたたんでいると、小さい子供のようなものが「ねぇねぇおかあさん」と背中にもたれかかってきました。姿は見えませんが、それが家の犬だと、夢の中の私はわかっているのでした。

「ねぇお母さん、またおでかけなの？」

「うん、お父さんのお仕事だから、いいこでお留守番してて。それにたんたん（次男の愛称）に会って、元気かどうかみてくるからね」

「っていうかさ、たんたん、いったいどこいっちゃったの？このごろ全然家にいないじゃん」

私はびっくりして目が覚めました。この七カ月、犬がずっと次男はどこに行ったのだろうと考えていたのだと思うと、切なくて申し訳なくて、慌てて寝ている犬に説明をしました。犬は迷惑そうにシッポをぱたりぱたりと振りながらきいていました。

思えば、人間同士のつきあいでも、言葉を介さない場合はたくさんあります。異国にいけば、言葉でとれるコミニケーションはわずかです。子供が小さい頃、喋り始める前にはいつも「どうしたいの？」「こうなの？」と話しかけます。そして親が年をとって、言葉でのやりとりが難しくなる場合もあります。

言葉にできなくても、そこに必ずその人の思いがあることを忘れないように、犬が思い出させてくれます。

そして、私自身が言葉をなくした時、私はどうやって自分の思いを他人に伝えるのでしょう。して欲しい事や、して欲しくない事、感じていることをどんな風に伝えたらいいのでしょう。犬のように、いらいらせず、押し付けがましくなく、そして愛らしく気持ちを伝える事ができるのでしょうか。今から犬を見習って、その練習をしておくべきかもしれません。

柴田法子さまは、日本画家柴田長俊氏夫人、笑顔が素敵な方で、魅力的な人

あれから三十余年

山崎慎子

思いがけず月参りに出るようになって、気がつけば三十余年の月日が流れた。義父が声を失い、義母も胃かいようの手術を受けるなど、必要に迫られてのことだった。

初めてお参りに行ったのは、赤ちゃんを亡くしたお宅。

ある夏の日、帰宅した私を待ち受けていたのは、切羽詰まった様子で待っていた義父の姿であった。その頃筆談で会話していた義父は、心せく様子で、赤ちゃんを亡くしたお宅へ行ってくれないかと言われた。戸惑う私。それまでお参りに出かけたことは一度もなかったし、およそ考えたこともないことだった。人前で読経するなんて、その作法もおぼつかないのに、どうしよう……。

ところが我が家の次男もその赤ちゃんと同い年であった。義父の切なく思う気持ちの前で、私はただ困り果てていた。

義父は「あなたが心をこめて一所懸命読経してくれれば、それで良いのだから、そのことが大事なのだから、一刻も早く行ってくれないかね」　私の拙い読経でも大丈夫ですかという問いに対する答えだった。

息子を亡くした母親の悲しみに寄り添う義父のその姿に、ともかくもそのお宅に伺った。

家全体の雰囲気が、何事が起こったのか受けとめかねているという感じに包まれているような中で、冷や汗をかきつつ枕経をあげた。七月初めの暑い夏の日のことが感慨とともに思い出される。

思い起こせば、まだ三十代に入ったばかりのことであり、不慣れで拙い私を、よく受け入れて頂いたなアとしみじみ有り難い。

あれから三十余年の時が流れた。その枕経を契機に、まるで以前からそれが決められていたような流れで、私の月参りが始まった。まだ充分若かった私を、多少の戸惑いと共に受け入れて頂けたことも有難かった。また、今は既に亡くなられたあるお爺ちゃんが、お参りを終って振り向いた私に、自分の小遣いを握らせてくれたこともあった。

「おまん若いのにナァ。だんなんさえ病気出さんかったらいがったのに」と、ねぎらいの言葉を添えて。暖かな想い出である。

お茶を頂きながらの話題も様々で、漬物の話から更年期の悩みなど、多岐にわたり時には私の相談にのって貰うこともあって、それなりの三十余年を過ごせたのであろうか。

しかし慣れというのは恐ろしい。夜更かしをしたあくる日、眠りそうになってハッとしたことがある。本の頁は繰られておらず、口だけは動いてい、腋の下に汗が流れる。誰かが言ったという〝お経の配達人〟になってはいないか。

はからずも義父の言葉がよみがえる。

「心をこめて一所懸命読経なさい。それが一番大事なのだから。」

帰敬式・法名を頂いたこと

北本町　齋藤美枝子

半年経った今でも、あの時の荘厳な、身の引き締まる思いは忘れられません。

その後、仏弟子としての行動が出来ているかと問われても恥ずかしながら全くできておりません。

でも、ふとした折りに、心のどこかにあの時のことが浮かんでくることもあり、私がこれから生きていくうえで、心のよりどころの一つになったようにも思います。

もう一つ、講義の中で「人生はやり直すことはできないが、見直すことはできる」というお話しがあり、含蓄のある言葉と受け止め考え続けていきたいと思っています。

（六組通信「聞思」より転載）

齋藤様はご夫婦で、推進員養成の真宗講座を受講され、昨年十二月初旬には、京都本山での後期講習にも参加されました。

俳句

風間汀爾

聖五月ショパンのタッチ八十の詩
紅薔薇や逝きし父の詩母の顔
夏めくや竹露澄みたる江戸切子
梅雨寒やベストを赤に老いの伊達
けふ泳ぐ金魚のいのち掬いけり
虹立つや俄に高き駒ケ嶽
茄子漬の紺鮮らけき朝餉かな
風鈴や一点風の在りどころ
佐渡の味さまざまに冷む冷蔵庫
登り来し卒寿の山の四葩かな

風間悌次（汀爾）氏は東京の人、大正八年生まれで九十一才。長年銀行の仕事に従事され、退職後は自由人として悠々自適の生活。俳句もその一つ。

暑いですね〜

山崎隆昌

今年は夏が早かった。七月中旬の梅雨明けとともに一息に夏が来た。昨年は八月に入っても梅雨が明けず、冷夏のまま秋に移ったことを思い出し、あまりの違いにあきれてしまう。

それにしてもうだるような暑い日が続く。厳暑、猛暑、酷暑、極暑、激暑、この暑さを何と表現したらよいのか。

気温三〇度を超える暑い日を「真夏日」と言う。正真正銘"夏の日"にふさわしい日ということか。それが今や真夏日が"涼しい夏日"となる異常さが恐ろしい。

この酷暑は、わが家の暮らしにも少なからず障りがあった。

本堂の荘厳仏華は三日と持たないし、墓前に供えられた花など、すぐにしおれて見る影もない。境内地の苔は茶色に変わり、木々の葉は力をなくし下を向いたままだ。水などやりきれるものではない。文字通り、焼け石に水とはこのことだ。

人間さまも「暑い！何とかしてくれ〜」の連呼で、ヘロヘロ、グッタリの毎日である。

もともと横着で散歩嫌いのワン公どもは、「この暑いなか散歩行くの？」というように人の顔を見上げるのだ。涼しくて気持ちのよいはずの早朝散歩は、五時半という時間にもかかわらず、蒸し風呂の中を歩くようで、赤く輝く朝のお天道様がうらめしく見える。

この暑さのなか、超高齢の母はいたって元気で、すこぶる快調である。ひぐらしクーラーの効いた部屋で過ごしていることもあるが世の暑さ騒ぎなど何処吹く風の様子。

母は大正四年の生まれで、本年七月四日には九十五才の誕生日を迎えた。家族、さらには遠くにいる子や孫からもお祝いされ、笑顔の連日であった。

そんな中、東京で看護師をしている孫から、少しおくれてカードを添えたお祝いの品が届いた。カードには次のように記されている。

おばあちゃんへ
遅くなりましたが、九十五才のお誕生日おめでとうございます。お祝いできることがとても嬉しいです。
暑い日が続いていますが、お元気でお過ごし下さいね。
葉子

暑さに汗を流しながら、このカードを見た我が家の一同は、祖母の九十五才の誕生祝いができることの喜びを素直に表す優しさに、すがすがしく気持ちのよい時間をもつことができたのである。